

獄医立花登手控え①

藤沢周平 春秋の檻



しゆんじゆう おり
春秋の檻 獄医立花登手控え①

ふじさわしゆへい
藤沢周平

© Shuhei Fujisawa 1982

昭和57年5月15日第1刷発行

昭和62年11月9日第11刷発行

発行者——加藤勝久

発行所——株式会社 講談社

東京都文京区音羽2-12-21 〒112

電話 東京(03)945-1111(大代表)

Printed in Japan

デザイン——菊地信義

製版——豊国印刷株式会社

印刷——豊国印刷株式会社

製本——加藤製本株式会社

落丁本・乱丁本は、小社書籍製作部宛にお送りください。
送料は小社負担にてお取替えます。 (庫一)

ISBN4-06-131763-6 (0)

講談社文庫

春秋の檻

獄医立花登手控え ①

藤沢周平

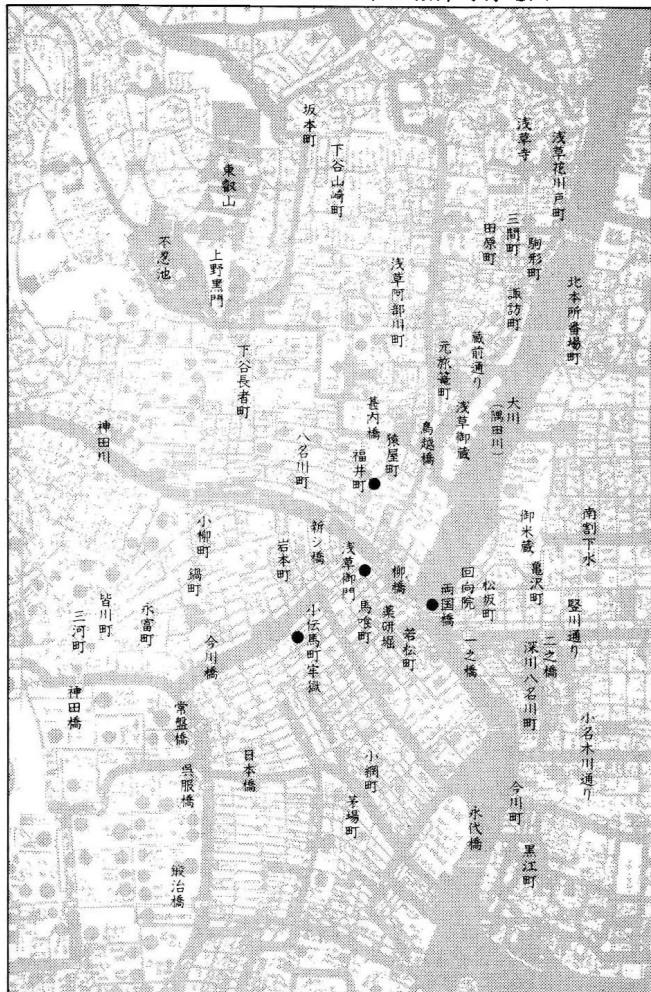
講談社

目次

雨上がり	七
善人長屋	三
女牢	八
返り花	二七
落葉降る	一五五
風の道	一九二
牢破り	三三
解説	二八
年譜	二七

尾崎秀樹

小伝馬町牢獄と立花登の住まい福井町付近図



春秋の檻

獄医立花登手控え

雨
上
が
り

—

雨が上ったあとの濡れた道を、若い男が歩いてた。

ひと夜降りつづいた雨は、明け方にやんで、道のところどころに水たまりを残すばかりだった。東の空に、雨を降らせた雲が、まだ青黒く残っている。雲にさえぎられて、日の光はまだ地上にとどいていなかったが、日がのぼった証拠に、雲のへりが金色に輝いていた。空気は澄みきって、三月の半ばとも思えないほど、肌寒い朝だった。

男は急ぐでもない足どりで歩いている。水たまりに來ると、軽く身体をはずませて飛びこえ、また変らない足どりにもどって、やがて町角を曲った。男が入って行った町は、深川三間町である。そして、町は間もなく左側が三間町、右が深川元町の家並みに変った。まっすぐ行くと、青黒い水がよどむ瓢箪堀ひょうたんぼりに突きあたる。

遠くまで見通せる道には、誰も歩いていなかった。早出の職人が路上に姿をあらわすまで、一ときの間がある。町はまだ半ば眠っていた。

瓢箪堀の手前に、元町に切れこむ細い路地がある。そこまで行ったとき、男ははじめて立ちど

まった。そしてゆっくり首を回して、いま来た道を振りむいた。

堅気の職人にもみえ、鋭い眼つきが、朝帰りの博奕打ちのようにも見える男だった。寝不足らしい疲れがみえる青白い顔に、無精ひげが生えている。男は立ちどまったまま、人気がない路地の奥を窺うように見た。男の顔を、かすかに怯えるような表情がかすめたようだった。男は小さく唾をのみこむ音を立てた。それから路地に踏みこんで行った。

同じような間口の裏店がならんでいるところ来ると、男はまた立ちどまった。そして鋭い眼を左右に配ったが、すぐに眼は一軒の裏店の戸口に吸いついて動かなくなった。

まだ男は動こうとしない。戸口から眼をはずして、またあたりを見回した。鋭い眼配りだったが、男の顔には不安のいろが濃くあらわれている。男はまた戸口に眼をもどした。そして今度は心を決めたように、しっかりした足どりで戸口に近づいて行った。

すると、男が近づくのを待っていたように、戸が内側から開いて、男が一人外に出て来た。背は低い、がっしりした身体つきの四十近い男だった。十手を握っていた。

「勝蔵だな」

中から出て来た男は、無表情に声をかけた。若い男は、うしろを振りむいた。するといつの間に出て来たのか、そこにも路地を塞ぐようにして、二人の男が立っていた。

若い男は、一瞬躍りあがるようにして、路地の奥にむかつて走りかけた。だがすぐにあきらめたらしく、肩の力を抜くとうなだれてもどって来た。

「よし、よし」

背の低い男は、なだめるように言った。

「悪あがきするんじゃないよ」

男が眼くばせすると、うしろを塞いでいた男のうちの一人が近づいてきた。そして腰にさげていた縄をほどくと、びっくりするほどすばやい手つきで、若い男を後手に縛りあげた。

「さ、行るか」

縄尻をとった男が、軽く勝蔵と呼ばれた男の背を突いたとき、雲が切れたらしく、まぶしいほどの日の光が路地にさしこんだ。一人の縄つきの姿が、無残なほどの明るみの中に浮かび上がった。

背を突かれた若い男は、踏み出しかけた足を一瞬とめて、男たちの肩越しにさっきの戸口を振りむいた。

「おみつ、いるか？」

ひと声男が呼んだ。覚悟を決めたらしい、野太く落ちついた声だったが、開いた戸口からは誰もあらわれなかった。

男たちのやりとりは、むしろひっそりしたものであったので、裏店の者たちは短い間に演じられた捕物に気づかないらしかった。男たちが去ったあとでも、裏店は静まり返ったままだった。

ただ、十手を持った男が出て来た家の戸が、しばらく経って音もなく内側から閉まった。

二

新谷弥助が焦って襟をつかみに来た左腕を、登はつかませてからぐいと押しさげてはずした。そのときには登の右腕は、新谷の左腋から背を巻いて、顎にかかっている。首を振ってのがれ

ようとする新谷を、登はすばやく相手の左股をすくいながら、自分も右後方に体を捨てるようにして投げた。

新谷は一回転して畳に落ちたが、すぐに跳ね起きると両腕をのばして来た。

「立花、もう一本来い」

「いや、今日はこれまでだ」

登が言くと、新谷はうなずいて稽古着を直し、札をかわした。

起倒流の鴨井道場で、この二人は高弟なので、手を休めて見ていた者もいたが、二人の稽古が終ると思いいきに乱取りの稽古にもどって行った。

登が道場の隅で着換えていると、新谷が寄って来て、帰るのかと言った。

「うむ。今日は小伝馬町に泊りだ」

「おれも帰るか」

と新谷は言った。新谷は近ごろ稽古に懈怠がみえる。

「しかし先生が留守だし、貴公も帰ってはまずかろう」

「なに、あとは奥野さんにまかせればよい」

奥野研次郎は、二人より三つ四つ年上で、師範代を勤めているが、鴨井道場ではこの奥野に登と新谷を加えて、三羽鳥と呼びならわしている。

振りむいてみると、奥野は道場の真中あたりにいて、熱心にまわりに稽古をつけていた。年長者らしく、風貌も物腰も落ちついた男である。

「では、一緒に出るか」

と、登は言った。

奥野に後を頼んで、二人は神田若松町にある道場を出た。空が曇っていた。それでいてどことなく空気が蒸すのは、季節がもう梅雨に踏みこんでいるのかも知れなかった。

二人は両国広小路の方にむかった。今夜は小伝馬町の牢泊りと決まっているのだから、まっすぐそちらにむかう方が早いのだが、寄食している叔父の家が、浅草御門外の福井町にある。一人はそこに戻らないといけない。叔父よりも叔母の方がそういうけじめにうるさかった。

「いつも貴様の首投げにやられるな」

新谷が首をかしげて言った。

「おれの腕力が弱いのか」

「それは違うぞ、新谷」

と登は言った。

「おれは先生にもやって見たが、びくとしなかったな」

鴨井左仲は、小柄で痩せている。だが同じ業をかけても、根が生えたように動かなかったのを、登は思い出していた。

「まだまだ、この道未熟というわけか」

「そういうことだ。おれも貴公の蟹ばさみによくひっかかる」

二人は低く笑った。だが新谷はすぐ憂鬱そうな顔になった。

「しかし、このごろは稽古に身が入らん」

「なぜだ？」

登は新谷を振りむいた。

「なにか、わけでもあるのか」

「いや」

新谷は首を振った。軽捷な業の持主に似つかわしい細面の顔に、苦笑が浮かんでいる。

「わけはない。ただ、なんとなくさ」

「……………」

「柔術をやっても、それで飯が喰えるわけでもあるまい。そう思うようになったということかな」

新谷は微祿の御家人の三男だった。登と同年の二十二である。これまではただ夢中で柔術に打ちこんで来たが、そろそろ身の振り方が気になって来たということかも知れなかった。

「立花はいい」

口の重い登が、どう挨拶したものかと迷っていると、新谷がつづけた。

「医者という仕事が決まっているからな」

「医者といつても、いまは見習いの牢医者だ」

「それでもいいではないか」

と新谷は言った。

「いずれは叔父御のあとをついで、町医者として門戸を張るわけだろう。おれも医でもやればよかった。柔術ひと筋は、ちと誤った」

「貴公はそういうが、何しろ居候の身分だからな。これでなかなか苦勞もあるぞ」

「しかし、あのおちえさんとかいう美人と一緒になるのだろうか。それまでの辛抱さ」

登は苦笑した。二度ほど叔父の家に連れて行ったことがあって、新谷は叔父の一人娘のおちえを知っている。だがおちえは、新谷が考えるような娘ではなかった。

新谷の家は北本所の南割下水そばにある。両国橋の方に遠ざかるうしろ姿を見送って、登も浅草御門にむかった。

羽後亀田藩には、上池館と名づける医学所があつて、登はそこで医学を修め、三年前に江戸にいる叔父の家に来た。希望に胸ふくらませて来たと言つてもよい。

登の家は微禄の下士で、家をつぐでもない次男を上池館に通わせるゆとりなどはなかったが、登の熱心な願いが父母を動かした。母のなをは、内職の仕事をふやして、登を医学所に通わせた。

登は、子供のころから、医者になろうと心に決めていた。動機は単純で、母から、たびたび母の弟小牧玄庵の話聞いてるうちに、自分も叔父のような医者になりたいと考えたのである。

叔父は同じ亀田藩の母の実家小牧家の末子として生まれた。しかし幼年のころから神童の噂が高く、藩校長善館に学んだあと、さらに世話するひとがいて、隣国久保田藩の明徳館に転じた。やがてその中で養寿局と称した医学館で医を修業して、そこでも俊才の名をほしいままにした。江戸に出たのは、叔父が二十四歳の時だと聞いている。

母の実家も、貧しいことでは立花家に劣らない。その家から出て、独力で江戸で医を開業するに至った叔父小牧玄庵の話は、母の口から語られると、一篇の甘美な物語のように、登を感動させた。叔父は、登の向学心をふり立たせる、内なるきらめく星だった。

上池館でひととおりの医術修業を了えたころ、登は江戸の叔父に手紙を出した。江戸に上つ

て、さらに医学を修めたいというのぞみが、押さえがきかないほどにふくらんで、それには必ず叔父が力になってくれるだろうと思つたのである。

返事はなかなか来なかつた。繁昌している叔父は、返事を書くひまもないのだらうと思ひながら、登は根気よく手紙を書いた。そして来たければ来てもよいという叔父の手紙がといたのが三年前である。登は勇躍して故郷を後にした。行手の江戸の方角の空に虹がかかっている気がしたものだ。

だが、江戸に来た登が見たものは、場末のようにうらさびれた町の中にある、だだっ広いだけで古びた家、無口で酒好きで怠け者の叔父、叔父を尻に敷いている叔母、母親に似て美貌だが驕慢な娘などだった。

小牧玄庵ははやらない医者だった。そして家計と酒代をおぎなうために、小伝馬町の牢医者をかけ持ちしていた。登が十四、五のころ、一度幕参にもどつて来た叔父が、今度幕府の御用を勤めることになったといつたのがそれで、登の母が「玄蔵（玄庵の旧名）も、肥ってひと風格出来た」と喜んだそれは、ただの酒肥りに過ぎなかつたのである。

「どうだ、驚いたか」

数日して、叔父と叔父の一家の正体がのみこめたころ、登の部屋にあてた四畳半にふらりと現われた叔父がそう言った。叔父はてれ笑いをしていた。

「ざっとこんなものだ。わしは口べただから、出世は出来なんだ」

叔父はそう言ったが、登には出世出来なかつたのが口べたのせいばかりとも思えなかつた。

叔父の医術は古かつた。診立ても投薬も、ひと時代むかしの方法そのままなのに登は驚いた。